

だがしや楽校@つるおか市民活動まつり

2012年3月25日（日曜日）鶴岡の天気：雪時々曇り 日も差す 一時みぞれ・雪あられ

【だがしや楽校@つるおか市民活動まつり】

第3回〈まず来ばいちゃ〉つるおか市民活動まつり（主催：つるおか市民活動まつり 共催：鶴岡市社会福祉協議会）が、鶴岡市総合保健福祉センター〈にこ♥ふる〉で開催されました。

つるおか市民活動まつりは、鶴岡市内のNPOなどの市民活動団体、各地域のボランティア団体や施設の代表者で実行委員会を構成し、鶴岡市民に市民団体やボランティア団体の活動、福祉施設の活動を知ってもらうだけでなく、団体間の相互交流を目的に、開かれているものです。

第1回目は鶴岡市中央公民館にて開かれましたが、今回は鶴岡市総合保健福祉センター〈にこ♥ふる〉での開催です。鶴岡市総合保健福祉センター〈にこ♥ふる〉は、健康と福祉に関する複合施設で、保健センター（鶴岡市健康課）、鶴岡市社会福祉協議会、鶴岡市ボランティアセンター、子ども家庭支援センター、障害者相談支援センターなどの事務所が入っているほか、休日夜間診療所、休日歯科診療所、第三学区コミュニティセンターも、この中にあります。

今回の“つるおか市民活動まつり”での、参加団体の出店・出展方法は、次の4通りです。
（ステージイベントを除き、午前11時～午後4時）

活動紹介ブースに参加したのは、結美の会、生涯スポーツ倶楽部“山芋太郎の友”、鶴岡市避難者の会、庄内総合支庁・公益のふるさと創り鶴岡（写真）です。



出店ブースでは、じゃがいも、糸蔵楽、もみじが丘、いなほ作業所、ふきのとうなどの福祉施設が出店・販売を行いました。

学びと体験コーナーに参加したのは、田川民話の会、鶴岡東高校茶道部、サークル手輪、要約筆記“庄内班”、鶴岡点字サークル、高校生ボランティアサークルいすず、鶴岡災害ボランティアネットワーク、鶴岡市ボランティアセンター、ふれあいハッピーの会（右の写真）、それに“だがしや楽校”です。

ステージイベント（午後1時～午後4時）には、丸岡桐箱踊り等保存会、田川民話の会、庄内芸能ボランティアサークル心、結美の会、エーデルワイス、サークル手輪が参加しました。



ほかに、午前10時からのオープニングセレモニーの後、午前10時15分からは「心づかい 言葉づかい」をテーマにした記念講演が開かれました。また、午後1時30分からは“新しい公共創造フォーラム”も開かれています。

これらの中から、“だがしや楽校”と“新しい公共創造フォーラム”を中心にご紹介していきます。



《だがしや楽校》

だがしや楽校だがしや倶楽部（鶴岡市・公益のふるさと創り鶴岡）による“だがしや楽校”は鶴岡市民そして鶴岡の子どもたちには、すっかりお馴染みです。この日は、鶴岡市総合保健福祉センター〈にこ♥ふる〉の2階にて、4つのおみせによる“だがしや楽校”が開かれました。

▼プラバン

公益のふるさと創り鶴岡によるおみせは、お馴染み“プラバンアクセサリー”です。



次々の子どもたちが遊びにやってきました。



ステージイベントを行う“丸岡桐箱踊り等保存会”の子どもたちも興じています。これって、団体間交流になっています。



子ども体験広場推進員の Doi さんも、子どもたちとの交流を楽しんでいます。



▼はこづくり

鶴岡市のMさんが出されたのは、身近な材料を使っの箱づくりのおみせです。



子どもだけでなく、大人の人たちも楽しんでいます。



ここでも“丸岡桐箱踊り等保存会”の子どもたちが興じています。



▼消しゴムスタンプ

東北芸術工科大学・大学院のYさん（山形市）による“消しゴムスタンプ”のおみせは、毎回大好評です。



地元のおばあちゃんとYさんとの交流風景も見られました。「世代を越えたコミュニケーション」と言われる“だがしや楽校”ならではの風景です。



▼環境カルタ

山形大学・エコキャンパス推進委員会の学生たちが考案したのが“環境カルタ”です。“環境フェアつるおか”をはじめ、鶴岡市内のイベントでは頻繁に紹介されています。



子どもに混じって大人も真剣勝負！？



だがしや楽校でいっぱい遊んでくれた子どもたちには駄菓子のプレゼント



まだまだ“だがしや楽校”は、いっぱい子どもたちは地域の人たちでにぎわっていますが、そろそろ“新しい公共創造フォーラム”が始まりますので、“だがしや楽校”はフォーラムの合間に取材することになりました。

《新しい公共創造フォーラム》

この日は、同じ鶴岡市総合保健福祉センター〈にこ♥ふる〉の3階で、新しい公共創造フォーラム（主催：山形県新しい公共推進協議会 主管：公益のふるさと創り鶴岡 共催：つるおか市民活動まつり、東北公益文科大学）が、午後1時30分より開かれました。

会場には、30人以上の人たちが集まりました。

はじめに、今回のフォーラムの主管を務めた公益のふるさと創り鶴岡の理事、阿部等さん（写真）より挨拶があり、プログラムに入りました。



プログラムは次のとおりです。

第1部 新しい公共と山形県の支援事業について

説明者：平尾清氏（山形大学／エンrollment・マネジメント部／教授）

第2部 新しい公共と行政との協働

対談：阿蘇裕矢氏（静岡文化芸術大学・教授）×佐藤博幸氏（鶴岡市議会議員）

第3部 先進事例研究

講師：高橋由和氏（特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク・事務局長）

第4部 会場との質疑応答

◎第1部 新しい公共と山形県の支援事業について

説明者：平尾清氏（山形大学／エンrollment・マネジメント部／教授）

東日本大震災の発生を受けて、山形大学と東北芸術工科大学の提携プロジェクト“Smile Trade 10%”を展開している平尾さんからは“新しい公共”について、その背景となることを紹介しながら、お話しされました。以下、その概要です。



阪神淡路大震災以降、「失われた20年」と言われる今の日本。そこに漂うのが閉塞感。東日本大震災によって、さらに厳しい状況に追い込まれています。加えて複雑にしているのは、多様な価値観と情報の氾濫によるコミュニケーションの難しさ。

そこで求められるやり方の転換。

これまでのやり方・・・経済中心。経済成長が第一。競争。組織優先。効率。自己犠牲。

これから・・・人々を中心に、支え合い、生活圈を創造すること。閉塞感から躍動感へ。全体性の再生（格差の解消）。ゼロからではなく。昔からあったものの再生。

いろんな視点・多様な価値観を持つことで、転換できる。

視点を変えることが「新しい公共」の「新しい」である。

日本人が不変的なものとする「組織」優先から個人を尊重する考え方へ。

これまで、努力は個人の資質・自己責任とされたが、努力も環境によって左右されるという視点へ。事実、環境によって自分の活躍が左右された経験は誰にでもあったこと。

コミュニケーションを考える時も環境が左右されるという視点へ。

私たちが当事者になって社会を変えようとする時の最大の武器はコミュニケーション。

“新しい公共”は『公共』を身近に取り戻すこと。それは、観客として地域に参加するのではなく、自分自身が自ら社会に参加すること。自分自身と社会との関係性の再構築。

◎第2部 新しい公共と行政との協働

対談：阿蘇裕矢氏（静岡文化芸術大学・教授）×佐藤博幸氏（鶴岡市議会議員）

佐藤さんが自分の考えを含めながら話を進め、それに対して庄内出身の阿蘇さんが解説・助言する形での対談でした。

話の内容としては、行政と市民との関係、市民と議会との関係、議会と行政との関係からはじまり、地域資源としての、大学などの教育機関、企業との関わり、さらには市民や若者についての話などに展開しました。すなわち、新しい公共を進めるには、地域資源、特に人材の活用が欠かせなくなるわけですが、対談でもあったように、人材はいないです。なぜなら、積極的に地域づくりに参画する市民はほとんどいないからです。

阿蘇さんによりますと、静岡・浜松では、そういう意味でも人材はたくさんいるとのこと。しかし、庄内では（米沢も同様です）その反対で「出る杭は・・・」になってしまいます。

そこで対談では、教育機関が持っている知恵の活用、よそ者の活用などが紹介されました。いずれにしても、佐藤さんもおっしゃられましたが、新しい公共を進めるには、行政や議員もそうですが、市民にも覚悟が必要です。「誰かがやってくれるだろう」では“新しい公共”は進みません。



◎第3部 先進事例研究

講師：高橋由和氏（特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク・事務局長）

地縁型コミュニティ（地域コミュニティ）と志縁型コミュニティ（NPO）を融合させた事例として山形県内はもとより全国的にも注目され、高く評価されている山形県川西町の“きらりよしじまネットワーク”。

その立役者と言って良い高橋さんのお話をあらためて聴講して感じるのは“新しい公共”を目的に活動するのではないということです。それは“協働”とか“地域づくり”という言葉にも当てはまります。

人は誰でも「楽しく生き甲斐を持って人生を送りたい」と思っています。そのために、「自分が住んでいる地域を住み良くしたい」「住んでいて良かったと思う地域にしたい」と思うはず。そうすると、地域にあるさまざまな課題が見えてきます。こうした課題を解決しようとする動き・活動を地域づくりと言います。

これまで、その地域づくりを行政が担ってきました。私たちは行政に頼ってきました。

しかし、行政が地域づくりすべてを担う時代は終わりました。それは行政を取り巻く環境だけの問題ではありません。本体、地域づくりとは、そこに住んでいる住民が主体になって取り組むべきことです。なぜなら、地域に潜む課題は、住民が最もわかっているからです。

問題は、これまでの住民は、その地域課題がわかっているにもかかわらず、しきたり・しがらみに縛られていたため、動こうとはしませんでした。日本特有の「行政はお上」という考え方も、住民主体の地域づくりを阻んできました。

そこで、大切なのは「自分たちの地域をどうすれば良いか」という具体的なビジョンを見出すことです。そうすることで、地域に蔓延る課題が具体的に見えてきます。そうなれば、取り組み方も具体的にわかってきます。人・モノ・金・情報をどうすれば良いかも見えてきます。特に人については、どのようにして人材を育成すれば良いかもわかってきます。人材育成というと、若者を思い浮かべますが、高齢者も人材育成の対象です。

このように組み立てた上で、住民ひとり一人に説明していき、“きらりよしじまネットワーク”が形成されていきました。

この会は“新しい公共創造フォーラム”と題されましたが、実は“新しい公共”を創造するものではありません。地域課題を解決するための活動である“地域づくり”において“新しい公共”という考え方・手法を活かすことで、住み良い地域を創造することなのです。

フォーラムでは、先進事例として“きらりよしじまネットワーク”を紹介しましたが、高橋さんが言うように、“地域づくり”を理解すれば、これは先進事例ではなく、当たり前の取り組みなのです。すなわち、“きらりよしじまネットワーク”の取り組みが、“地域づくり”に於ける当たり前の取り組みになってこそ、本フォーラムの目的に近づくことなのです。

このような視点を持つことで、少しは“新しい公共”が見えてきます。



第4部 会場との質疑応答

阿蘇さんを除く3人がステージに上がり、平尾さんをコーディネーターに、会場との質疑応答が行われました。

この中で印象に残ったのは、「地域での高齢化」と「地域づくりへの若者参加」です。

これで私も同感に思ったのは、「高齢化そのものは問題ではない」ということです。発言にあったように「おじいちゃん・おばあちゃんも地域に出て活動しましょう」なのです。おじいちゃん・おばあちゃんの経験・体験は地域の宝です。この宝を活かさない手はありません。

ただし、ここで考えなければならないのは、地域への参画の仕方です。これまでと同じような参画の仕方では、「長老にまかれろ」とか「高齢者だけの世界」になってしまいます。地域にはさまざまな世代の人たちが住んでいます。そういう人たちと接点を持つことができる参画の仕方であり、場を設けることです。

これは「地域づくりへの若者参加」にもつながるテーマです。平尾さんや高橋さんが話されたように、「若者に期待する」と言っただけで終わってしまうシンポジウムがあったり、「若者に期待しているのに若者が参加しない」と言っている人たちに限って、若者が参画するためのことを何もしていないのです。

このように考えますと、「新しい公共」の下で地域づくりを進めるには、発想の転換が必要であることがわかります。だから「新しい」なのでしょう。

ここまで“新しい公共創造フォーラム”についてお伝えしてきましたが、ある意味“だがしや楽校”も“新しい公共”としての取り組みでもあります。『自分みせ』がキーワードの“だがしや楽校”こそが、地域住民主体の地域づくりの場であるからです。

3時間半近くにわたり熱い議論が展開したフォーラムは、主催者メンバーのひとり・沼野慈さん（NPOもがみ 写真）による閉会の挨拶で、午後4時50分すぎ、終了しました。



企画・制作・編集・文責

山口充夫（だがしや楽校コーディネーター）